©Thérèse Wassily Saba

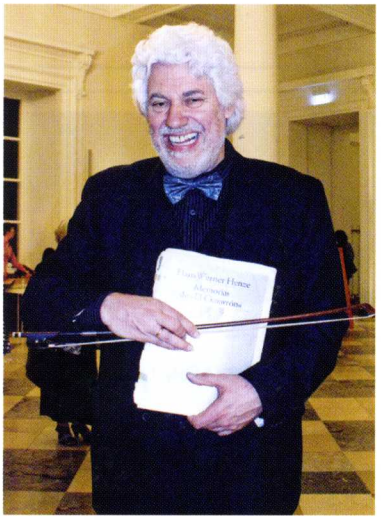
第20回 コブレンツ 国際ギターフェスティバル＆アカデミー 2012

コブレンツの街はドイツ南西部、モーゼル河とライン河の合流域に位置する。両河の合流点は Deutsches Eck（ドイツの角）と呼ばれ、河川交通の要所・観光名所として知られている。この街で毎年開催されている「コブレンツ国際ギターフェスティバル＆アカデミー」も 2012 年で第 20 回目を迎えた。この記念すべきフェスティバル（5 月 21 ～ 28 日）の様子をワシリー・サバ氏のレポートによりお伝えする。

（文・写真：テレーズ・ワシリー・サバ／翻訳：関塚亮司）
Thérèse Wassily Saba　Ryoji Sekizuka

❖ オープニング・ナイト・コンサート

コブレンツ国際ギターフェスティバル＆アカデミーは、今年で 20 回目になる。そこで、オープニング・ナイト・コンサートでは特別なイベントとして、このフェスティバルを長年サポートしてきたコブレンツ市長ヨアヒム・ホフマン＝ゴーティッヒ博士、ライン地方 LOTTO 理事ヘルベルト・ラウバッハ、コブレンツ国際ギター協会長リヒャルト・コッホ・セムナーのスピーチが行なわれた。このコンサートの演奏者に選ばれたのは、コブレンツ国際ギターアカデミーの 2 人の指導者アニエロ・デシデリオとフーバート・ケッペルだった。



フーバート・ケッペル：手にしているのは H.W. ヘンツェ作品の演奏に使用したヴァイオリンの弓と楽譜（5 月 21 日夜）　©Thérèse Wassily Saba

フーバート・ケッペルは、これまで 20 年間にわたり、フェスティバル開催に重要な役割を担ってきた。今回は彼は、1993 年に開かれた第 1 回フェスティバルと同じプログラムを演奏した。レオ・ブローウエル〈カンティクム〉の迫力のある演奏で始まったが、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ〈逃亡奴隷（エル・シマロン）～エステバン・モンテホの自叙伝〉は、記憶に残るような名演奏だった。このヘンツェの作品は、エステバン・モンテホという逃亡奴隷の物語であるが、ケッペルは複雑なギターパートを演奏しながら、同時にドイツ語でストーリーを語った。物語の雰囲気を作りだすために、ギターをタッピングしてリズムを出したり、ヴァイオリンの弓を使ってギターを弾いたり、口笛や舌打ちの音を出したりと、テクニックを駆使していた。難曲にもかかわらず、フーバート・ケッペルの演奏は素晴らしかった。

第 2 部の始めに、**アニエロ・デシデリオ**がアグアドの〈ファンダンゴと変奏〉を演奏し始めると、ホール全体が完璧な静寂に包まれた。繊細な *pp* で始まった彼の明るくデリケートなアーティキュレーションが、聴衆の心をとらえ、ホール全体に音が響き渡った。コスト〈旅立ち〉でも、同じように美しく素晴らしいギターの音を響かせた。ブローウェル〈オリシャスの祭礼〉では、まるで脅迫するように響く低音の繰り返しによって作り出さ

れる緊張感がドラマのような効果を挙げた。アニエロ・デシデリオは、ゲオルグ・シュミットの作品〈トッカータ〉と〈エレジー〉をドイツで世界初演した。〈トッカータ〉は動きが速く、未知のものへの期待感を作りだす絶え間ない緊張感が特徴。〈エレジー〉は平和の喜びを感じさせくれた。

❖ イブニング・コンサート

翌日、5月22日は、**福田進一**がブローウェル、武満 徹、J.S.バッハという充実したプログラムで演奏した。まず、ブローウェルの〈悲歌〜イン・メモリアム・トオル・タケミツ〉の美しい雰囲気を持った演奏で始まり、次いで福田自身の編曲によるバッハの〈無伴奏チェロ組曲第3番BWV1009〉を演奏した。福田進一のフレージングは、非常に音楽的であり、彼が弾く音楽との強い人間的な結びつきを感じさせる特別な演奏であった。彼が2008年のコブレンツ国際ギターフェスティバルで世界初演したブローウェルの〈コンチェルト・ダ・レクイエム〉をベースに作られた、〈ハープと影〜武満へのオマージュ〉を聴くのはとても心地よかった。そして、福田進一は、武満徹の〈すべては薄明のなかで〉とバッハ〈無伴奏チェロ組曲第6番BWV1012〉を演奏した。偉大な芸術家による偉大なプログラムであった。

この週のイブニング・コンサートは、すべて高い水準を維持していた。5月23日の**アルバロ・ピエッリ**は、ホアキン・ロドリーゴの3楽章からなる〈スペイン風ソナタ〉の演奏から始まり、ミゲル・リョベート〈ソルの主題による変奏曲〉、エドゥアルド・サインス・デ・ラ・マーサの3作品、レノックス・バークリー〈ソナチネ〉、デュシャン・ボグダノヴィッチの〈リチェルカーレ〉を演奏した。演奏終了後、プログラムに感激した聴衆のスタンディング・オベーションがあった。

マヌエル・バルエコも、今年は素晴らしい演奏をしてくれた（5月24日）。J.S.バッハ〈無伴奏チェロ組曲第1番BWV1007〉、スカルラッティの〈ソナタ〉5曲、ウクライナの作曲家ドミトリ・ヤノフ＝ヤノフスキーがバルエコのために書いた〈Little Lute Music in Memory of John Dowland〉、アルベニスとグラナドスの作品数曲を演奏したが、すべて音楽的で、洗練された演奏であり、彼の解釈の深さが聴衆に強いインパクトを与えた。彼もスタンディング・オベーションを受けた。

私が、特に楽しめたのは、5月26日のイブニング・コンサートで、**デイヴィッド・ラッセル**が演奏したシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスの〈組曲第14番〉だった。彼は、ギターでリュートの音を響かせる工夫をしたが、メロディーを美しく聴かせてくれた。同じように見事だったのは、フランソワ・クープランの4つの作品、〈病み上がりの女〉と、速くて明るいベルのような響き

福田進一：リサイタル終演後、日本人の若者たちと一緒に（5月22日夜）
©Thérèse Wassily Saba

デイヴィッド・ラッセル・リサイタル（5月26日夜）　©Thérèse Wassily Saba

を聴かせた〈ソフィ〉、メロディーが魅力的な〈イバラのような女〉、そして〈パントマイム〉だった。これに現代のラテン・アメリカ作品であるホルヘ・モレルの3曲〈Pampero〉、〈Barcarola〉、〈Jugueteando〉と、セルジオ・アサドの〈サンディーの肖像〉を入れて、プログラムのバランスをとった。

エリオット・フィスクのマチネー（5月28日）は活気があった。比較的静かな部分では、彼の優れた音楽性を味わえたが、すぐにフルパワーの演奏に入り、楽器の限界を超えた領域まで彼のテクニックを駆使するので、音質が犠牲になってしまっていた。エリオット・フィスクという人は、ギタリストとしてユニークな音楽家であり、彼の音楽性は超一流である。もし、彼がピアニストであったなら、いかなる感情表現をしようとも不快な音を出すことはないだろう。しかし、不幸なことに、ギターという楽器は、演奏者がどれほど感情に動かされたとしても、指の使い方を厳しくコントロールすることが求められる楽器なのだ。

❖ 4pm コンサート

毎晩のイブニング・コンサートの他に、午後4時からのリサイタルもあった。それぞれ1時間程度の演奏であったが、演奏の質は高く、**ゴラン・コリヴォカピチ**のソロリサイタル（5月23日）では、バッハの〈無伴奏ヴァ

ゴラン・コリヴォカピチ・リサイタル（5月23日午後）　©Thérèse Wassily Saba

アニエロ・デシデリオとライン州立フィルハーモニー管弦楽団のリハーサル
©Thérèse Wassily Saba

市教会の階段でウォーミングアップ中の、（前列左より）アニエロ・デシデリオ、デイヴィッド・ラッセル、（後列左より）ジュディカエル・ペロワ、アレクサンダー・ラミレス、ゲルハルト・ライヒェンバッハ（5月27日午前）　©Thérèse Wassily Saba

ゲオルグ・シュミット、ラッセル・ポイナー、トビアス・カッスング、ギュンター・シリングとアンサンブル・オブ・ジュニア・ギター・アカデミー　©Thérèse Wassily Saba

イオリン・パルティータ第2番BWV1004〉を、一切の虚飾なしで演奏したが、聴くものに、まるでバッハが彼のためにこの作品を書いたのではないかと感じさせるほど、彼はこの作品を自分のものにしており、非常に高い音楽的完成度を見せた。

マルティン・ディリャは、武満 徹〈森のなかで〉を絵画のように演奏し、シューベルトの素晴らしい歌曲と、グラナドスの〈詩的ワルツ集〉を披露した（24日）。

ファビオ・ザノンは、レイモン・ムラールトが1926に書いた〈組曲〉を世界初演し、ソル、M=トローバ、フランシスコ・ミニョーネの作品を詩的に演奏した（25日）。

ゾーラン・ドゥキッチは、忘れることのできないテレマンの〈ファンタジア〉を演奏（26日）。

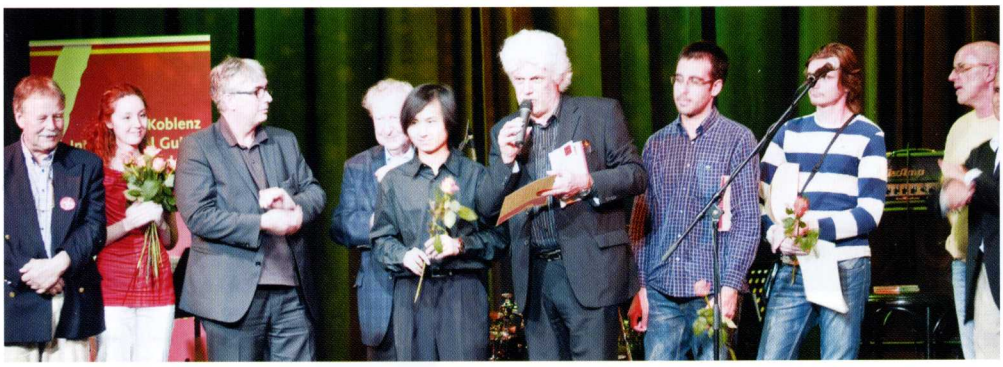
2010年コブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル”で第1位を獲得した**ラファエル・アギーレ**は、ドビュッシー、アルベニス、パコ・デ・ルシアの作品で音楽的かつパワフルな演奏を聴かせ、スタンディング・オベーションを受けた（28日）。

4pmコンサートの中に、ブルガリアの若手ギタリストである**デイヴィッド・ディアコフ**がいたが、彼は2011年のコブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル”で優勝している。彼が受賞した賞の一部に、KSG Exaudioでの CD録音が含まれており、彼のリサイタルは『Il Diabolo』というタイトルのアルバムの発売記念コンサートになった。天才ヴァイオリニスト兼作曲家ニコロ・パガニーニは、しばしば“Il Diabolo”（悪魔）と呼ばれた。デイヴィッド・ディアコフは、パガニーニの〈カプリス第4番〉、〈第9番〉、〈第11番〉、有名な〈第24番〉の4曲を録音しているが、この作品を、若手演奏家にしか期待できないような速さで演奏した。他には、バッハ〈無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番BWV1004〉の印象的な終曲〈シャコンヌ〉を披露した（22日）。

❖ ギターとオーケストラのための金曜夜のコンサート

“ギターとオーケストラのための金曜夜のコンサート”（25日）には、2人のギタリスト、アニエロ・デシデリオとホアキン・クレルチが選ばれ、選帝侯宮殿（Kurfurstliches Schloss）を会場に、スリランカの若手指揮者レスリー・スガナンダラジャーが指揮するライン州立フィルハーモニー管弦楽団と共演した。

ホアキン・クレルチは、彼自身の作品である〈カセレス協奏曲 "Concierto de Caceres"〉を演奏した。この作品はオーケストラをフルに活用した曲で、全体を通して***f***を



コンクール表彰式：(5月27日)
(左より) ギュンター・フォルステナイヒナー、(1人おいて) ゲオルグ・シュミット、コンラート・ラゴスニック、チア・ウェイ・リン (第2位首席)、フーバート・ケッペル、ジュゼッペ・ツィンカッリ (ロドリーゴ特別賞)、アントン・バラノフ (第3位)、ベルティエ・ハーン。 ©Thérèse Wassily Saba

ライブハウス『カフェ・ハーン』における、アコーステッィク・リズム・アンサンブルの演奏 ©Thérèse Wassily Saba

強調したあまりギターとオーケストラの対話というよりも、ただ大きな音を出すことに集中した演奏のように感じられた。従って、オーケストラが強すぎてギターパートがほとんど聴こえず、ギタリスト兼作曲家の作品とは思えない演奏だった。

アニエロ・デシデリオは、ジョン・マクラフリンが彼に献呈した作品〈ヨーロッパ：盗賊と詩人〉のニューバージョンを世界初演した。この作品は繊細にオーケストレーションされ、ギターとオーケストラのバランスが良かった。オーケストラの演奏が素晴らしく、招聘された指揮者が若いにもかかわらず、充分に敬意をもって聴かれた演奏だった。カール・マリア・フォン・ウェーバー作曲の2つの序曲の演奏も良かった。レスリー・スガナンダラジャーの指揮を通じて、彼がいかにこの作品を愛し、理解しているかを聴衆が感じ取れる演奏だった。

❖ イエズス教会でのミサ

フェスティバルの20周年を記念して、イエズス広場にある市教会堂として知られているイエズス教会でカトリックの特別ミサが行なわれた (27日)。ミサでは、〈キリエ・エレイソン〉、〈グローリア〉、〈クレド〉、〈サンクトゥス〉、〈アニュス・デイ〉が、コブレンツ・ギター・アカデミーの合唱団によって歌われた。ミサが行なわれている間に**デイヴィッド・ラッセル、アニエロ・デシデリオ、ゲルハルト・ライヒェンバッハ、アレクサンダー・ラミレス、ジュディカエル・ペロワ**がソロ演奏をし、ギュンター・シリングが指揮するジュニアー・ギター・アカデミーの若手ギタリストたちによるギターオーケストラで、重奏用に編曲されたヴァイス〈シャコンヌ〉の素晴らしい演奏が行なわれた。若手ギタリストのためのジュニア・ギター・アカデミーを指導しているのは、ギュンター・シリング、ラッセル・ポイナーとトビアス・カッスンである。

❖ 2012年コブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル”本選

2012年コブレンツ国際ギターコンクール“フーバート・ケッペル”の本選は、27日に選帝侯宮殿で行なわれた。コンクールの結果は、**第1位:該当者なし、第2位:チア・ウェイ・リン** (台湾)、**第3位：アントン・バラノフ** (ロシア) だった。ホアキン・ロドリーゴの作品の解釈が優れていた演奏家に与えられるホアキン・ロドリーゴ特別賞は、**ジュゼッペ・ツィンカッリ** (イタリア) に贈られた。国際コンクールの審査員の構成は、今年5月に80歳の誕生日を祝った**コンラート・ラゴスニック**博士を委員長として、ジュディカエル・ペロワ、アルフレッド・エックホルト、ゴラン・コリヴォカピチ、アレクサンダー・ラミレス、ロバート・ブライトモア、ルーチョ・マタラッツォ、アンスガー・クラウゼ、ゲルハルト・ライヒェンバッハ、デール・カバナフ、マックス・オプ・デン・カンプ、ギュンター・シリング、トビアス・カッスング、テレーズ・ワシリー・サバであった。

❖『カフェ・ハーン』コンサート

ジャズのライブハウスである『カフェ・ハーン』のオーナー、ベルティエ・ハーンは、このフェスティバルの開催当初から参加してきた。“カフェ・ハーンにおけるコブレンツ・ギター・フェスティバルの20年”と題した今年のプログラムでは、ギタリストのジョスコ・ステファンとトルステン・グッズ、ルーディー・リング (キーボード)、トマス・ククリス (ドラムス)、ニコ・ブランデンブルク (ベース) によって編成された“アコースティック・リズム・アンサンブル”が演奏した。また、コブレンツ国際ギターコンクールの表彰式は、カフェ・ハーンでの休憩中に行なわれた。

豪華講師陣によるマスタークラス：福田進一（5月23日）、デイヴィッド・ラッセル（24日）、マヌエル・バルエコ（25日）、ファビオ・ザノン（28日）。 ©Thérèse Wassily Saba

聖母教会でのルネッサンス音楽演奏会（5月26日）。 ©Thérèse Wassily Saba

❖ マスタークラス

マスタークラスを行なったギタリストも豪華で、デイヴィッド・ラッセル、マヌエル・バルエコ、エリオット・フィスク、福田進一、アルバロ・ピエッリ、ゴラン・コリヴォカピチ、マルティン・ディリャ、ホアキン・クレルチ、ファビオ・ザノン、ジュディカエル・ペロワ、ゾーラン・ドゥキッチ、ラファエル・アギーレ、ロバート・ブライトモア、アレクサンダー・ラミレス、ゲルハルト・ライヒェンバッハ、アンスガー・クラウゼが行なった。アニエロ・デシデリオのマスタークラスでは、レスリー・スガナンダラジャー指揮、ライン州立フィルハーモニー管弦楽団の伴奏で、ホアキン・ロドリーゴの〈アランフエス協奏曲〉を学生たちに指導した。

❖ その他の催し

土曜日（26日）は、聖母教会という市内中心部にある古い教会で、ルネッサンス音楽が演奏された。演奏したのは、アロンソ・ムダーラ作曲のミサ曲を自身の編曲で演奏したギタリストのラッセル・ポイナー、教会聖楽隊のコーラス、そしてトリを務めたのは、ヨハン・パッヘルベルの作品を演奏したオルガニストのマンフレッド・ファイグだった。コブレンツ・ギター・フェスティバルは、毎年聖霊降臨節、ドイツ語で "Pfingsten" という宗教的な祝祭の期間中に行なわれる。

フラメンコギタリストのラファエル・コルテスが息子と打楽器奏者でトリオを組み、マチネーリサイタルを行なった。信じられない速さとテクニックで、パコ・デ・ルシアの最も成功した作品を数多く演奏し、熱心な聴衆を魅了した。

多数のギターメーカーによる楽器の展示も行なわれた。出展したのは、ミハエル・ウイックマン、ゲルト・ピーターセン、アントニウス・ミューラー、カズオ・サトー、カート・クラウス・ヴォイト、アルミン&マリオ・グロップ、カナダの製作家ダリル・ペリー、ジェンス・タウエット、シュテファン・シュレンパー。ミハエル・マクミーケンは、彼のショップを特別に設け大勢の客を集めていた。その他フェスティバルの特別参加者として、弦メーカーのサバレス社からベルナール・マイヨとフィリップ・デュラント、ダダリオ社からトマス・オッファーマン博士が来ていたが、両社は、共にフェスティバルとコンクールの後援者である。

フェスティバル&アカデミー・ウェブサイト
www.koblenzguitarfestival.de
フェスティバル・ブログ
http://Koblenzguitarfestival.wordpress.com
ツイッター・アドレス
@koblenzguitfest